

書 評

鳥越皓之著

『柳田民俗学のフィロソフィー』

フレデリック・ルシーニュ※

鳥越皓之は『柳田民俗学のフィロソフィー』の中で、民俗学の方法上の特徴を真正面から議論しようとしている。この著作は2002年刊行で、新しく出版されたものでもなければ、また、書き下ろしの本ではなく、その中に収められた論考はそれ以前に執筆されたものである。しかしながら、本稿で鳥越の『柳田民俗学のフィロソフィー』について書評を書こうと思った理由は何かというと、最近行われた二つのシンポジウムにおいて実践性の問題が取り上げられており、それによって鳥越の理論を改めて考えさせられたからである。

その二つ内の一つのシンポジウムは2005年10月8日に開催された第57回日本民俗学会年會シンポジウム『野の学問とアカデミズムー民俗学の実践性を問う』と、2005年9月25日に行われた、関西学院大学21世紀COEプログラム主催の2005年第一回国際シンポジウム「語りえぬものを問うーエドガール・モランと現在あるものの社会学」であった。後者のシンポジウムでは社会学を中心に、歴史学、民俗学といった学際的な研究方法を用いて過去の歴史を問うことや調査者と被調査者の関係について論じることがテーマとされた。そこでは、フランスの著名な社会学者エドガール・モランの40年前に行われたフランス、ブルターニュ地方の一村であるプロゼベット (Plozevet) における調査が比較され、調査における実践性について論じられたが、日本における研究についての発表では、「出来事と経験」という古川彰の発表において、滋賀県知内村の260年にわたって村人が記した「村の日記」が紹介され、彼らの生活について紹介しながら、調査における実践性が議論された。その

発表の中では、民俗学という学問名称が現れていなかったけれども、民俗学者の鳥越皓之の理論が多いに紹介されていた。そこで、本稿では、こうした実践性についての問題関心を中心にして、『柳田民俗学のフィロソフィー』を読み直してみた。

『柳田民俗学のフィロソフィー』の章立ては次の通りである。序章は「民俗学的発想」、第1章「近代化論」、第2章「比較論」、第3章「環境論」、第4章「常民論」、第5章「心意論」、そして第6章は「実践論」と題している。結論の代わりにその最後の第6章「実践論」で本が締めくくられているということが示すように、取りも直さず、鳥越にとって民俗学の実践性が中核的な課題である。

鳥越の「常民の『生活ぶり』」に内在する知恵や歴史的個性という『基本的経験』こそが柳田の対象理解のための装置なのであり、それを通じて、現在の対象を凝視すれば、そこに国民（文化を共通とする人びとのこと）共通の知恵が生まれ、それぞれの国、それぞれの地域、および個人の本来的べき変化（近代化）も成し遂げられると考えていた（182項）という分析などに表れているように、柳田民俗学の実践性の特徴は心意論に結びついているということが分かる。鳥越によれば柳田の心意論というのは、ただ住民の「基本的経験」、つまり「心」を理解するような努力に限らず、住民自身が自分の思考様式に従って自分を研究し、自分の生活上の諸問題を解決してもらうように、住民に自己反省の能力を育てるという課題まで議論を展開している。そこに柳田民俗学の実践性のエッセンスがあると鳥越が主張している。

このような実践論の計画は科学的な営みだろうか。鳥越の著作の題名を見るだけでも、柳田国男の民俗学を形容するなら、「フィロソフィー」的な営みである、とこの著作が答えようとしている。しかし、だからと言って、著者から見てこうした「フィロソフィー」的な柳田の

※神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科博士後期課程

アプローチを単なる愛国主義や「古式週及論」(186項)によって形容することわけにはいかなかったということにもうなずける。

そもそも、柳田民俗学が持つ歴史民俗学としての要素は、近代化におけるいわゆる西洋化に対する一種の挑戦である。それは、柳田の研究姿勢が日本文化を守ろうとする側面に着目するがゆえにである。日本において「西洋文化」と言われるものと日本における「日本文化」との相違点こそが民俗学の誕生の条件であり、柳田民俗学への関心の原動力ともなった。柳田民俗学の研究当初から現在の日本民俗学にいたるまで、そこにはさまざまな変化が見られたが、民俗学研究の場では、「西洋文化」との相違という他者性の認識という論点が一貫して研究の中心的な役割を果たしたと言える。こうした「西洋文化」への問題関心は、西洋と日本という単純化された二項対立の図式を想起させるが、とはいえ、日本民俗学を愛国主義的思想と決め付けることはできないであろう。というのも、柳田は、『青年

と学問』において「日本の分担すべき学問」といったテーマを取り上げているように、普遍的なテーマについて研究しているからである。

このように、日本民俗学は、日本文化を取り上げてはいても、普遍的な相互理解の問題を第一に考えようとしてきたといえる。この点に関しては鳥越は柳田民俗学の実践性を前面に出しながら議論しているが、柳田の「心意論」と結びついていっているからこそ、説得力があり、とりわけ興味深い指摘だと思われる。しかし、そこから研究方法に関しては引き出される結論が分かれるので、これから少しずつこのテーマについて考察を深めたい。

東京大学出版会

A 5 判 / 240 ページ

本体価格：2800 円

2002 年 3 月刊

学界消息

中国民俗学会・北京民俗博物館 主催 『民族国家の暦日』

近代化の進む中国では、民俗・民族文化に対する関心もその一方では持たれ、研究会をはじめ、さまざまな催しが行われている。その中の一つ、旧正月に行われた「民族国家の暦日」シンポジウムの発表題目を紹介したい。周星「時間の民俗と文化」、高丙中「文化自覚と民族国家の時間」、マーク・スミス「時間と一つの国家」、アレン・アラウト「暦と行事」、陳勤建「七夕行事の特色と源流」、韓秀珍「社寺博物館における公共時間」、苑利「伝統的節句保持とその原則」、張勃「官製暦と民間暦」、左玉河「陽暦の採用と伝統行事の変化」、李連榮「青海省チベット族正月行事の重層性」、黃涛「清明節起源・変遷と公休化」、呂微「神話的時間の成立と形」、鹿憶鹿「台湾原住民の暦法と祭儀」、李道和「月齢—中国文

化の時空図式」、劉曉峰「中国唐代の年中行事体系」、劉宗迪「五行説に基づく月齢制度」、ミカエル・ジョーンズ「聖シモン節—ロスアンゼルス祭の日」、リチャード・パウマン「メキシコ祭儀における権威と反権威性」、劉魁立「伝統的祭と靈魂」ほか。私は、「民間暦と制定暦—時間認識の近代化—」と題し初日に日本の事例を話したが、マレーシア、タイなど多くの発表は帰国時間が迫り聞けなかった。

今年は、この他、旧七夕に江蘇省周荘で行われた「七夕の民俗」国際シンポジウム、四川省大凉山美姑県で8月に行われた第四回国際彝族学会に参加したが、いずれも内容の充実した研究集会であった。

(佐野賢治)